「濱口梧陵」の精神を共に学ぶ

世界48ヵ国、500人が集まり盛大に開催

第70回国連総会本会議（2015年12月22日）で制定された世界津波の日（11月5日）に合わせ、日本と世界の高校生が防災について考える「世界津波の日2018　高校生サミットin和歌山」が10月31日、11月1日の2日間、和歌山市の和歌山ビッグホエールで開催され、日本を含め世界48カ国から約400人の高校生、引率者らを含めて約500人が参加した。サミットは、地震・津波などの災害から命を守るため、自分たちに何ができるかを議論し、学ぶことを目的として一昨年から開催されており、第1回は高知県、昨年の第2回は沖縄県で開かれた。第3回となる今回は、「『稲むらの火』発祥の地で濱口梧陵（はまぐちごりょう）の精神を共に学ぶ」をテーマに2日間、分科会などを開催した。

開会式・記念碑除幕式

主催は和歌山県、同県広川町、同町教育委員会。国連国際防災戦略事務局（UNISDR）駐日事務所が共催、国土強靱（きょうじん）化推進本部などが後援している。

開会式では、各国から参加した高校生の代表者が壇上に上がった。議長は、和歌山県内の高校に通う、中井充歩さん（日高高校3年生）と伊森安美さん（串本古座高校2年生）が務めた。

和歌山県の仁坂吉伸知事は「濱口梧陵氏の気概に触れ、津波への理解を深め、ここ和歌山の世界一進んだ地震・津波対策を学び、将来それぞれの国で人々を救ってほしい」とあいさつした。

続いて今回のサミットに先行して10月28日から開催地の高知県から尾崎正直知事らが駆けつけ、実施されたスタディーツアーに参加した生徒を代表し、スリランカ、マーシャル諸島の各代表生徒が報告のプレゼンテーションを行った。同ツアーでは代表者が2班に分かれ、稲むらの火の館（広川町）、津波避難用高台（美浜町）、土砂災害啓発センター（那智勝浦町）などを訪問した。

【参加国】（海外）アルゼンチン▽オーストラリア▽ブラジル▽ブルネイ▽カンボジア▽カナダ▽チリ▽中国▽コモロ▽クック諸島▽デンマーク▽フィジー▽ギリシア▽インドネシア▽キリバス▽ラオス▽マレーシア▽モルジブ▽マーシャル諸島▽メキシコ▽ミクロネシア連邦▽モンゴル▽ミャンマー▽ナウル▽ネパール▽ニュージーランド▽ニウエ▽パラオ▽パプアニューギニア▽パラグアイ▽ペルー▽フィリピン▽ポルトガル▽韓国▽サモア▽シンガポール▽ソロモン諸島▽スペイン▽スリランカ▽タイ▽トンガ▽トルコ▽ツバル▽アメリカ▽バヌアツ▽ベネズエラ▽ベトナム

【参加校】（国内）北海道浦河高等学校▽学校法人札幌日本大学学園札幌日本大学高等学校▽学校法人富士見育学校▽学校法人大阪学・高等学校▽和歌山県立海南高等学校▽和歌山県立串本古座高等学校▽和歌山県立新宮高等学校▽和歌山県立星林高等学校▽和歌山県立耐久高等学校▽和歌山県立田辺高等学校▽和歌山県立橋本高等学校▽和歌山県立日高高等学校▽智辯学園和歌山高等学校▽岡山県立井原高等学校▽広島県立広島中学校・広島高等学校▽徳島県立城南高等学校▽愛媛県立宇和島東高等学校▽愛媛県立西条高等学校▽高知県立清水高等学校▽高知県立中村高等学校▽高知県立嶺北高等学校▽学校法人土佐塾学園土佐塾高等学校▽学校法人明徳義塾明徳義塾高等学校▽学校法人コングレガシオン・ド・ノートルダム明治学園中学校・台第一高等学校▽宮城県多賀城高等学校▽栃木県立佐野高等学校▽埼玉県立不動岡高等学校▽千葉県立稲毛高等学校▽東京教育大学附属高等学校平学芸大学附属国際中等教育学校▽学校法人大阪学園大阪高等学校▽学校法人関西学院関西学院千里国際高等部▽学校法人創価学園関西創価高等学校▽神戸大学附属中等教育学校▽兵庫県立尼崎小田高等学校▽兵庫県立舞子高等学校▽奈良県立畝傍高等学校▽学校法人西大和学園西大和学園中学校・高等学校▽和歌山県立海南高等学校▽和歌山県立串本古座高等学校▽和歌山県立新宮高等学校▽和歌山県立星林高等学校▽和歌山県立耐久高等学校▽和歌山県立田辺高等学校▽和歌山県立橋本高等学校▽和歌山県立日高高等学校▽智辯学園和歌山高等学校▽岡山県立井原高等学校▽広島県立広島中学校・広島高等学校▽徳島県立城南高等学校▽愛媛県立宇和島東高等学校▽愛媛県立西条高等学校▽高知県立清水高等学校▽高知県立中村高等学校▽高知県立嶺北高等学校▽学校法人土佐塾学園土佐塾高等学校▽学校法人明徳義塾明徳義塾高等学校▽学校法人コングレガシオン・ド・ノートルダム明治学園中学校・高等学校▽静岡県立池新田高等学校▽静岡県立裾野高等学校▽学校法人立命館立命館高等学校▽大阪府立西成高等学校▽熊本県立天草高等学校▽熊本県立済々黌高等学校▽大分県立佐伯鶴城高等学校

開会式。スタディーツアー報告などが行われた

会場の外で記念植樹

記念碑の除幕式

地震・津波対策へさまざまな議論

本大会の主役は、全世界から集まった高校生の諸君。若い皆さんにあえて伝えたいこと。「あなた、何千人、何百万人もの仲間のためにも、今回た方は、それぞれの出身国において、何千、何万もの国民から選ばれたエリート」であるということ。あなた方だけが、この機会を通して得た地震・津波に関する正しい知識と、災害から人々を救い災害から立ち直るノウハウを身に付けるチャンスを得ている。そのような機会を得られなかった、何千人、何百万人もの仲間のために、将来それぞれの地域や人々を救うために生かしていく義務がある。

フランス語で「ノブレスオブリージュ」という言葉がある。私なりの理解は、「エリートは危急には津波が来ることを知っていた。地震が起きたら、高台へ避難しなければならないことも知っていた。しかし、地震が発生したのは夜で、広川の人々が暗闇の中、高台に避難してくれるのか心配になった濱口さんは、高台にあった収穫直後の米が詰まった稲むら、すなわち農家にとっての全財産に火を放ち、村人に知らせた。その結果、この再び私財を投げうって、人々の命を救ったのだ。濱口さんの献身はこれにとどまらない。被災直後、人々は食べるものもなく家を建て直そうとしても、建設資材はなかった。濱口さんは、惜しげもなく自らの財産を使って、これらの人々に資材を提供した。

また、人々は仕事を失い、収入の道も途絶えた。そこで濱口さんは、たわけでもない。濱口さんは、領主が命じ堤防を村に作ることを考えだ。これが、危機に瀕した自らの出身の村の人々のために、自主的にこのようなことをしたのだ。これが、本当のエリート、本当のノブレスオブリージュの姿である。

地震・津波は、プレート境界で発生する。1946年、この地をまた大きな津波が襲った。しかし、濱口さんが広川町に造った堤防が、見事に人々を救うことができた。それが、今も残る「広村堤防」だ。

私は、この濱口梧陵さんの行動は、歴史上初めて人類が部分的ではあるが津波に打ち勝った事例だと思う。だからこそ国連は、この濱口梧陵さんが稲むらに火を放った11月5日を「世界津波の日」としたのだ。

濱口梧陵さんの生まれた日本は、たびたび津波に襲われ、大きな犠牲を払いながらも、着実に対策を強化している。また、ここ和歌山県でも、濱口梧陵さんの気概に触れ、津波への理解を深め、世界一進んだ地震・津波対策を学んでほしい。

自国で知識生かせ

和歌山県・仁坂吉伸知事あいさつ

記念碑の除幕式

スタディーツアー報告（スリランカ代表）

スタディーツアー報告（マーシャル諸島代表）

高校生と談笑する二階自民党幹事長（左端）

記念碑とともに記念撮影

会場での記念撮影

分科会の様子